

原 遺 跡 10

—原遺跡群第20次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第688集

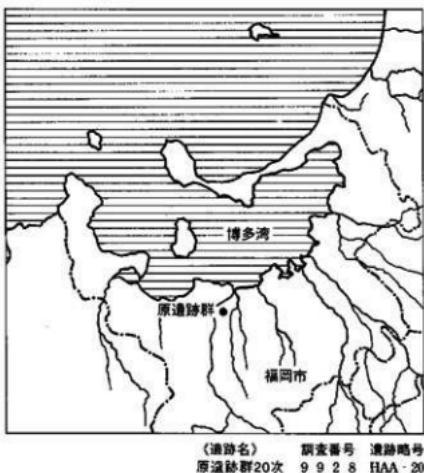
2001

福岡市教育委員会

hara
原 遺 跡 10

—原遺跡群第20次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第688集



2001

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから、大陸における様々な東アジア文化を受け入れる主要な窓口として栄えてきました。人や物の交流は盛んで、その結果多くの文化的遺産が培われ、今日に至っています。それら文化的遺産を保護するという立場から、福岡市教育委員会では、開発に伴い失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を行い、記録保存という形で、往時の有様を後世に伝えています。

本書は平成11年度に行いました原遺跡第20次調査の成果について報告するものです。原遺跡第20次調査では、弥生時代の竪穴住居や掘立柱建物など、集落の様子を窺うことのできる多くの成果を挙げることができました。今回の調査による遺構・遺物の数々は、この地域における歴史を考える上で、重要な手がかりとなるでしょう。

この書が、市民の皆様の埋蔵文化財、ひいては地域の歴史に対する御理解の一助となり、また考古学上、地域史上の研究資料として御活用戴ければ幸いです。

最後になりましたが、今回の調査において費用の負担をはじめとする御協力をいただきました株式会社ベスト電器、地権者大神三男氏、ならびに地元の方々を始めとする関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成13年3月30日

福岡市教育委員会

教育長 生田 征生

例　　言

- ・本書は福岡市教育委員会が行った原遺跡第20次調査の報告である。調査期間は1999年7月12日から1999年10月7日まで。調査は藤富士寛が担当した。
- ・本書使用の標高は海拔高。方位は磁北で、真北との偏差は $6^{\circ} 21'$ である。
- ・第Ⅱ章3の鉢型については、実測・拓本に福岡市教育委員会常松幹雄氏の手を煩わせ、併せて様々な御教示をいただいた。そして瓦質上器に関しては、東京国立博物館白井克也氏に御教示いただいた。そして文章は岡氏の御教示をもとに、藤富士がまとめた。したがって、理解不足による事実の誤認など、その文責は藤富士にある。
- ・本書で使用した遺構実測図は藤富士の他、天野玄普（別府大学大学院生）が作成し、製図の一部は星野忠義の手を煩わせた。
- ・本書に関する資料は、この後福岡市埋蔵文化財センターに収蔵される予定である。

本文目次

はじめに.....	1
1. 調査の成果.....	1
2. 調査に至る経緯.....	2
3. 調査の組織.....	2
I 遺跡の立地.....	3
II 調査の記録.....	4
1. 遺跡の状況.....	4
2. 遺構・遺物.....	6
3. 遺物特説.....	19
まとめ.....	21

挿図目次

図1 調査成果	1
図2 遺跡の立地	3
図3 土層 (1/100)	4
図4 遺構配置 (1/200)	5
図5 穫穴住居1 (1/60)	6
図6 穫穴住居2 (1/60)	7
図7 穫穴住居3 (1/60)	9
図8 穫穴住居3出土遺物 (1/4)	10
図9 穫穴住居4 (1/60)	11
図10 穫穴住居4出土遺物 (1/4)	12
図11 溝1・2 (1/100)	13
図12 溝3 (1/40)	14
図13 土坑1・2・3 (1/60)	15
図14 掘立柱建物1・2 (1/80)	17
図15 その他の遺物 (1/2、1/4)	18
図16 鑄型 (1/2)	19
図17 瓦質土器 (1/4)	20
図18 次郎丸遺跡出土瓦質土器 (1/4)	22

図版目次

図版1 上 調査区西側 (北から)	
中 調査区東側 (北から)	
下 北側落込部 (南東から)	
図版2 上 穫穴住居1 (北から)	
中 穫穴住居2 (北から)	
下 穫穴住居3 (北西から)	
図版3 上 穫穴住居4 (北西から)	
中 穫穴住居3遺物出土状況1 (北西から)	
下 穫穴住居3遺物出土状況2 (北東から)	
図版4 上 溝1・2 (北から)	
中 溝1 (西から)	
下 溝3 (西から)	
図版5 上 土坑1 (北西から)	
中 掘立柱建物1・2 (北から)	
下 掘立柱建物1・2 (北西から)	
図版6 出土遺物	

はじめに

1. 調査の成果

主な遺構

時代	種類
弥生時代中期後半	竪穴住居 4軒
古代～中世(?)	掘立柱建物 2棟 溝

特記遺物

鋳型
瓦質土器

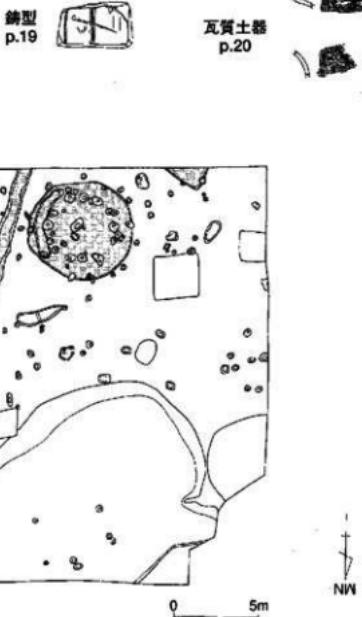


図1 調査成果

2. 調査に至る経緯

1999年2月26日、株式会社ベスト電器より、早良区原6丁目2-30における店舗立替に関して、埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。それを受け、福岡市教育委員会では試掘調査を行い、遺跡がある事を確認した。その後、両者の間で協議を行ったが、建築予定建物ではどうしても遺構面にまで建物の影響が及ぶことが判明。記録保存のための埋蔵文化財発掘調査を行うこととなり、1999年7月12日より調査を開始した。

3. 調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

調査委託：株式会社ベスト電器

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

教育長 西憲一郎（前） 生田征生（現）

文化財部長 柳田純孝

埋蔵文化財課長 山崎純男

埋蔵文化財課調査第1係長 山口謙治

調査庶務：文化財整備課 宮川英彦

調査担当：埋蔵文化財調査第1係 蔵富士寛

調査補助：天野玄善（別府人文学大学院生）

調査作業：伊藤ミドリ 井上ムツ子 牛尾二三子 鬼塚友子 加島定次郎 川口シゲノ

田中栄 永島重俊 西島マツ子 西嶋ムラ子 西嶋洋子 平田千鶴子 堀本歳四郎

山西人美 横尾泰弘 駒坂チカ 駒坂信重 駒坂ミサヲ

整理作業：柴田加津子 萩本恵子 日名子節子 松田弘子

遺跡名 原遺跡群第20次調査

遺跡調査番号	9928		遺跡略号	HAA-20	
地番	福岡市早良区原6-2-30		分布地図番号	No82 原	
開発面積	1,554m ²	調査対象面積	1,159m ²	調査面積	1,008m ²
調査期間	1999年7月12日～1999年10月7日				

I 遺跡の立地

原遺跡群は早良平野の中央を流れる室見川中流の東岸に位置し、標高6～7mの低位段丘上に広がる遺跡群である。その東側、室見川との間に、有田・小田原の台地があり、有田遺跡群が存在する場所として知られている。

原遺跡群においては過去、19度にわたる調査が実施されている。その結果、原遺跡群では縄文時代から中・近世に至るまでの遺跡が営まれていることが明らかになっており、特に遺跡の北側では、弥生時代・古墳時代の遺跡が数多く発見されている。

今回の調査（第20次調査）地点は遺跡指定範囲の北東隅にあたる。周辺では、南西隣において第2・5次調査、また西側100m程の所で、第13・14次調査が行われている。第2・5次調査においては、溝・掘立柱建物・土坑といった中世（10～12世紀）の遺構が確認されており、その他弥生時代・古墳時代といった遺物が出土している（柳田編1997）。今回の調査では竪穴住居・掘立柱建物といった弥生時代の集落址を確認することができたのだが、このような弥生時代の集落に関して、第13次調査（下村編1990）や第14次調査（瀧本編1992）では中期の竪穴住居が検出されている。この周辺で弥生時代の集落が広がっていたことは容易に想像できよう。

文献

下山智編1990「原遺跡4」

福岡市埋蔵文化財調査報告書第233集 福岡市教育委員会

瀧本正志編1992「原遺跡6」

福岡市埋蔵文化財調査報告書第235集 福岡市教育委員会

柳田純孝編1997「原遺跡9」

福岡市埋蔵文化財調査報告書第544集 福岡市教育委員会



図2 遺跡の立地

II 調査の記録

1. 遺跡の状況

今次調査地点は原遺跡群指定範囲の北東側端部にあたることは前述したが、予想を上回る遺構の検出をみた。

現在、遺跡の周辺では、店舗・住宅が立ち並び、北側至近の位置に県道202号線が走るなど、現状からは過去の地勢を窺うことはできない。調査の結果、現地表下1m程の位置で遺構を確認した。遺跡の層序は図3に示した通りである。

まず、60~80cmほどの厚さで客土がなされ、その下に30cmの水田耕作土が堆積する。使用時期は良く分からぬが、さほど古くさかのぼるものではないだろう。そして10cmと薄い遺物包含層下に、今次調査の対象となった遺構面が存在する。遺構は暗灰黄褐色(Hue2.5YR 4/2)を呈する、やや砂質の堆積土上で認められ、包含層は暗赤褐色のシルト質土である。

遺構面では、調査区北側に落ち込みをみることができる。調査区北西側では両側の立ちあがりをみるとができるため、これは溝状を呈するのかもしれない。落ち込み部の深さは30~50cm程度で、埋土の中には、弥生時代中期後半の遺物を主体として、古代・中世などの土器が若干混じる。

遺構の大半は、この落ち込み部分より南側に存在する。その内容は、住居址(p. 6~12)、溝(p. 12~14)、掘立柱建物(p. 16~18)、土坑(p. 15, 16)、ピット群である。便宜上、住居址では西側から順に1~4の番号を付した(図4)。そして溝、掘立柱建物なども、本文中では、図4にみられるような番号で呼称していくことにする。遺構の埋土はいずれも褐~黒褐色シルト質土で、違いはない。また遺構に伴う遺物等の検討から、これらの遺構の多くは、弥生時代中期後半に属するものと考えられる(p. 21、まとめ参照)。

今回の調査では、排土処理の関係から、調査区を東西2つに分けて、それぞれに調査を行った(図版1上・中)。遺構自体の残存状況は悪く、遺物の総量はコンテナ10箱に満たない。以下では、遺構、そして出土遺物についての所見を述べていくことにしたい。

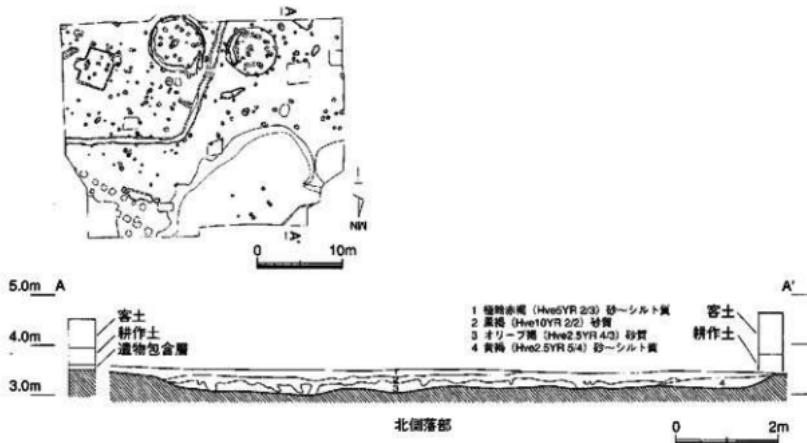
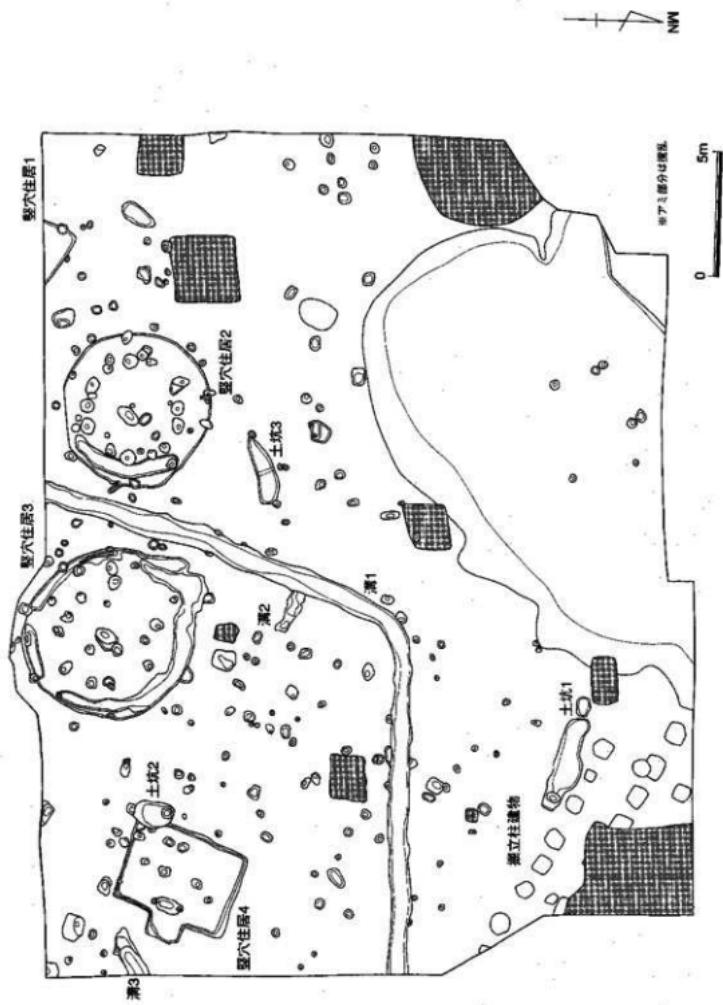


図3 土層 (1/100)

圖 4 造耕配置 (1/200)



2. 遺構・遺物

竪穴住居

今次調査では、合計4軒の住居址を検出することができた。円形を呈するものが2軒（竪穴住居2・3）、方形を呈するものが2軒（竪穴住居1・4）である。円形住居に比して、方形のそれはやや小形である。調査区内において全容を確認することのできた住居2・3・4は、いずれも炉穴ではない土坑を中心には有する。良好な状態で遺物を検出し、住居の時期（弥生時代中期後半）を知ることができたのは、住居3のみであったが、他の住居址においても、埋土や柱穴中から出土した土器をみる限り、時期的には住居3と大差ない。あくまでも出土遺物をみる限りにおいてであるが、この4軒の住居はさほど時間的な差を持たず、営まれていた可能性が高い。円形住居十小形方形住居、これが当調査地点における住居構成であろう。以下に、各竪穴住居の調査所見について述べる。

竪穴住居1（図5、図版2上）

所見

調査区南西隅にある住居である。隅部がわずかに調査区内に存在しているだけで、その大半は調査区外にある。住居外形線は「く」の字に折れ曲がり、また屈曲部以外は直線的であることから、恐らく方形の平面形を呈していたのである。遺構の深さは10cm程で、他の住居と同様、遺存状況は極めて悪い。確実にこの住居に伴うと考えることのできる柱穴は、實際に存在する1つのみである（柱穴1）。ただし、この柱穴は床面より深さ5cmほどしかない。

出土遺物

柱穴1から出土した上器口縁部片が1点あるのみである（図5-1）。口縁部で、断面錐形を呈する。内・外面丹塗り。高杯形部である可能性がある。

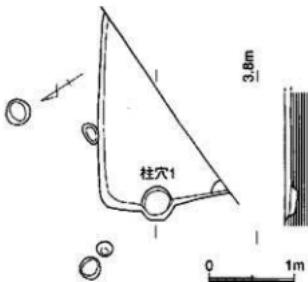


図5 竪穴住居1 (1/60)

竪穴住居2（図6、図版2中）

所見

調査区南側中央、溝1の西側に存在する住居であり、径6m程の円形を呈する。周壁の残高は5cmにも満たず、遺構の遺存状況は極めて悪い。住居の中央には、長さ95cm、幅50cm、深さ35cmの平面精円形を呈する土坑がある。底面は狭く、断面はややすり鉢形を呈する。被熱の痕跡はない。

住居の中ほどで径4m程の円を描いて並ぶ柱穴群が、主柱穴に相当するもので、計15検出できた（網掛け部分）。その内の2つが切りあっているため、少なくとも一度は立て替えが行われたのであろうが、各柱穴がどのような組み合わせであったのか、先後関係は不明である。柱穴掘方の深さは50~70cm。いくつかの柱穴には柱痕跡が認められ、その径は10~15cm程である。

なお、住居の南東側には周壁と10~50cm離れて、周壁に沿うように、ごく浅い溝が存在する。溝の幅は50cmほど、深さは3cm程度である。この部分のようにはっきりとはしていないが、同様のごく浅いくぼみは住居全周に渡って認められる。

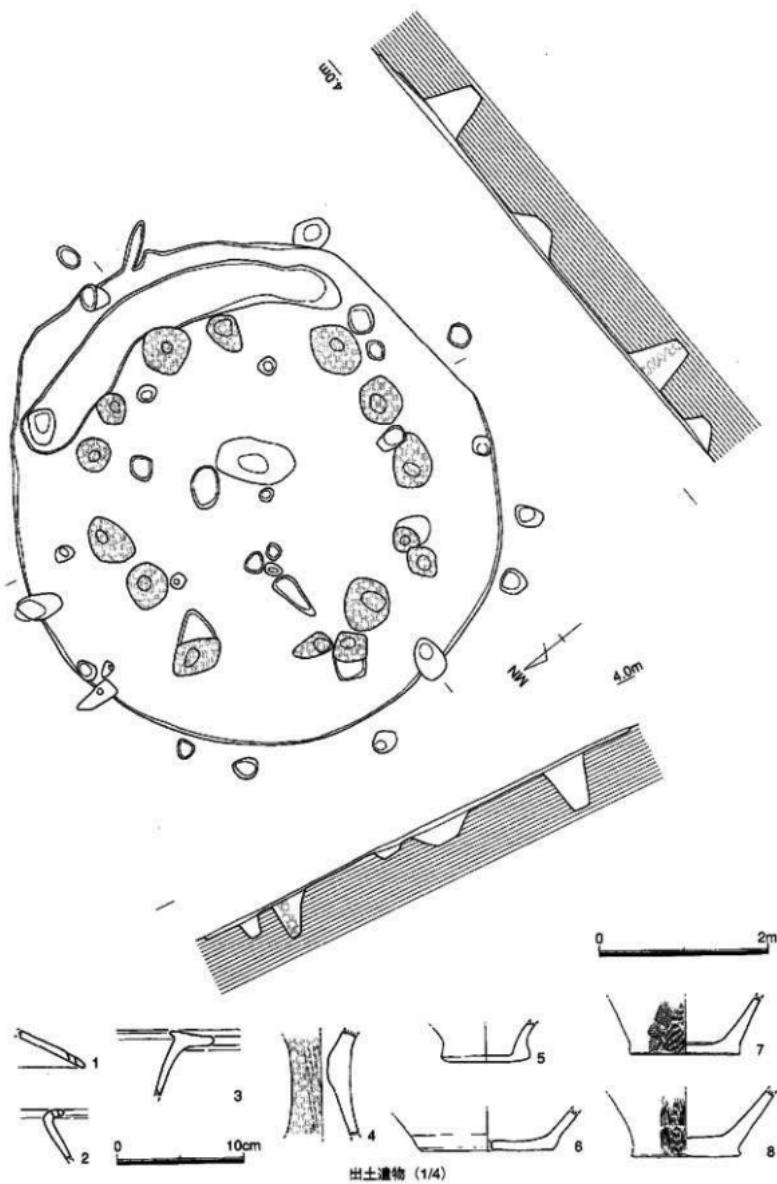


図6 積穴住居2 (1/60)

出土遺物

遺構の残りは悪く、覆土もごくわずかのため、住居・柱穴内から出土した遺物は土器の細片が中心である。1は蓋口縁部で、穿孔を有する。2のような無頭壺の蓋に相当するものか。2は無頭壺の口縁部。同じくL口縁部に穿孔を有する。3は広口壺などの口縁部。その断面は鈍形を呈する。4は高杯脚部。外器面はヘラミガキを施す。丹塗り。5～8は底部である。5は底部が薄く平底で、外面はくびれを持つ。7・8の外器面にはハケ目調整を施す。いずれも平底で、8の外面はわずかなくびれを有する。

竪穴住居3（図7・8、図版2下・6）

所見

調査区南側の中央、溝1の東側に位置する住居である。径6.5mの円形の北西部分に張り出し部を設けたような平面形を呈している。長軸長は7.5mを測り、住居2より一回り大きい。周壁残高は5～7cm程度で、この住居も遺存状況は悪い。住居中央には長さ90cm、幅50cm、深さ40cmの土坑があり、この土坑北東側にピットが近接して認められる。住居2のそれと同じく、底面の狭いすり鉢形を呈している。

この上坑にも被熱の跡は存在しなかったが、上坑北東側の床面が70×70cm程の範囲で硬くしまった焼土が検出され、さらに北東側では一部その上に載る形で、炭層が堆積していた。

住居中央に径4m程の円形に向る柱穴群（薄い網掛け部分）が主柱穴である。この主柱穴群の南西側に、これら主柱穴と同じ内容をもつ柱穴が2つ存在する（濃い網掛け部分）。これは主柱穴とほぼ同様の大きさを有するもので、住居の立候を示すものかもしれない。主柱穴では、柱間隔が2.5mと広いものから、0.7mとごく狭いものまである。仮に、住居張出部—中央土坑—柱穴1を結んだ輪線を想定してみると、主柱穴は左右対称の配置を採ることが分かる。これにより、主柱穴にみる計9本の柱が、一度の住居を支えたもので、住居張出部が出入口に相当する可能性が指摘できよう。柱穴2・3の入口側に存在する柱穴4・5は入口の家根材を支える柱であったのかもしれない。各主柱穴の深さは30～50cm、柱痕跡を明確にみることはできなかった。

遺物出土状況（図版3中・下）

竪穴住居3では、床面直上に押しつぶれた状態で、遺物を検出することができた。遺物は大きく6群に区分可能で、それぞれにかなり形を保った土器を復元することができる。土器1は甕（1個体、ほぼ完形；図8-3）、2は甕（1個体、ほぼ完形；図8-4）、3は器台（2個体、ほぼ完形；図8-6・7）、4は甕（底部；図8-2）、5は甕（口～胴部片；図8-1）、6は高杯（杯部；図8-5）。土器4と5の個体は接点こそないが、その特徴から同一固体になるものとみなして良い。

出土遺物

1～4は甕である。1・2は同一固体。1は口径23.2cmを測る。胴部の最大径は中央やや上方にある。口縁部は断面「く」の字形を呈し、内面には稜線を有する。器面調整ははっきりとしないが、2をみると限り、外器面にはハケ目調整が施されていたのであろう。2は底径8.7cm。わずかに上げ底上を呈し、外面はわずかにくびれる。外器面はハケ目調整を施す。3・4は断面「く」の字形の口縁部を有し、内面には稜線を有する。胴部の最大径を上方に持ち、口径と胴部最大径はほぼ等しい。底部は平底で、外器面にはハケ目調整を施す。3は口径30.6cm、器高34.5cm、底径8.8cm。4は口径30.8cm、器高37.1cm、底径9.2cmを測る。5は高杯杯部で、杯部は楕形を呈する。口径28.0cmを測り、内外器面ともに、丹塗り。6・7は器台。6は器高15.8cm、7は器高16.1cmをそれぞれ測る。

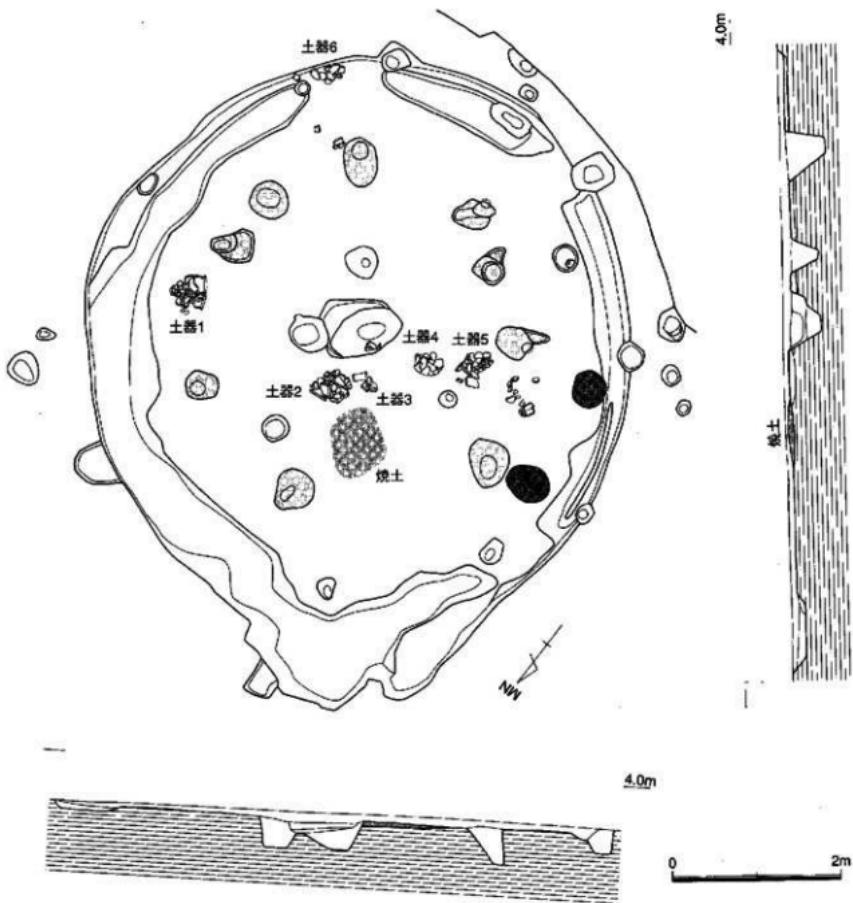


図7 穂穴住居3 (1/60)

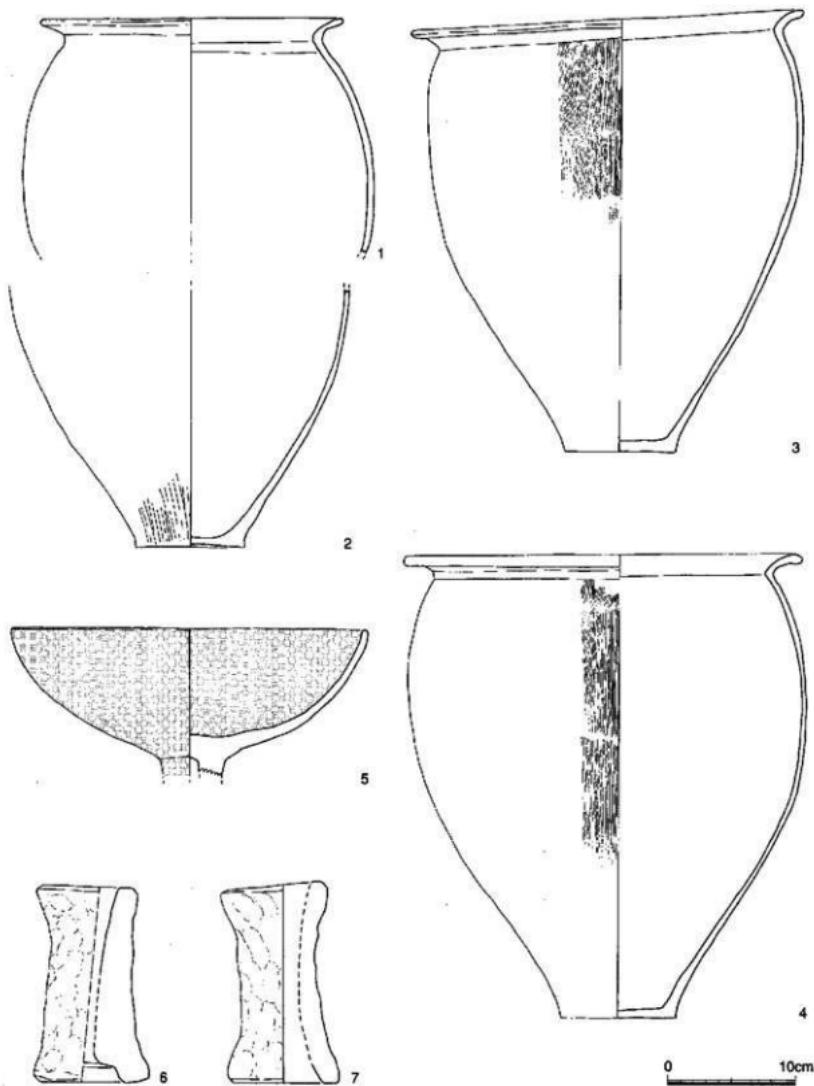


図8 積穴住居3出土遺物(1/4)

竪穴住居 4 (図9、図版3上)

所見

調査区南東隅に存在する竪穴住居である。住居南西隅を土坑2によって切られる。現状では4.5×3.5mを測る長方形の南東側長辺に凸部を付した平面形を探っている。凸部を含めた住居の長さは4.5m。周壁の残高は12~15cm程で、他の住居と比すれば、良い遺存状況を示している。住居内では、周壁に沿って深さ5cm程の浅い溝が認められる。これは住居方形部分に顯著で、凸部ではその一部に認められるのみではっきりとしない。住居方形部のちょうど凸部と接する辺りで、土坑が検出された。長さ1m、幅0.5m、深さは15cmほどで、その南北両端にはピットが1つずつある。これにも被歴の跡はない。

主柱穴は、住居ほぼ中央にある2つの柱穴が相当しよう(網掛け部分)。深さは40~50cmで、径12cm程の柱痕跡が残る。ただ、方形部中にある他のピット4つも、40~50cmと上柱穴とほぼ同じ深さを持つ。

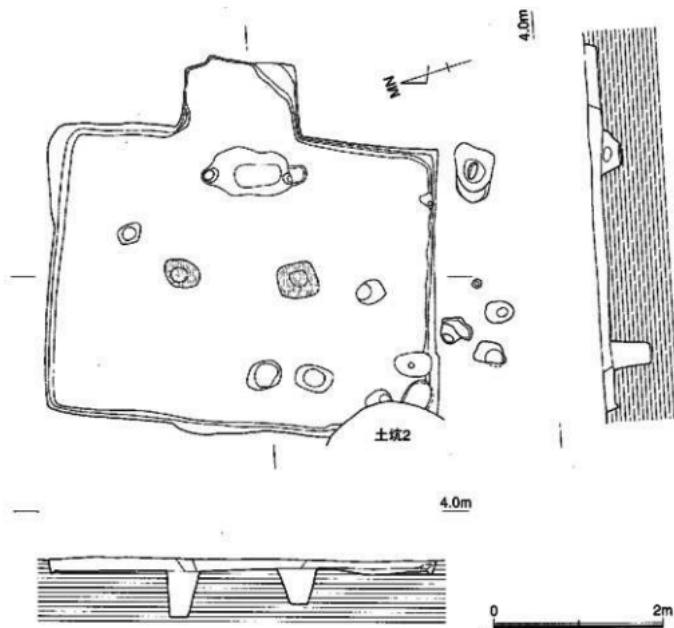


図9 竪穴住居4 (1/60)

出土遺物

住居の覆土中に含まれていたもので、土器の細片が多く、確実にこの住居に伴うと考えられる遺物とはいえない。1は高杯口縁部。断面鉤形を呈し、口縁端面には刻目を有する。内・外器面とも丹塗り。2・3は高杯脚部で、2は外面に丹塗りが施される。4は甕口縁部。断面は鉤形を呈し、その端面には刻目を施す。また口縁部下には突帯を巡らす。内・外面とも丹塗り。5・6は甕口縁部で、いずれも断面「く」の字形を呈し、口縁端部がやや肥厚する。外器面にはハケ目調整を施す。7は高杯の脚部。底径(復元)13.2cmを測る。外器面には丹塗りを施す。8は器台の脚部。9は甕などの底部で、底径8.4cmを測る。

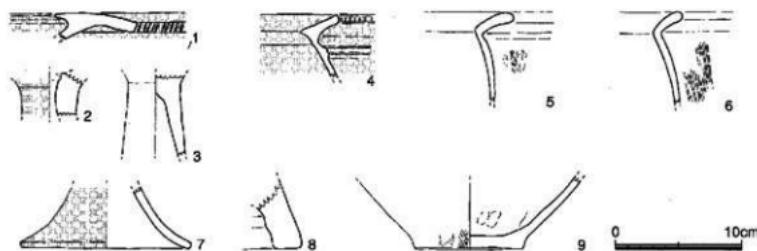


図10 窓穴住居4出土遺物(1/4)

溝

2次調査では、計3本の溝状遺構を検出できた。調査区南壁～東壁にわたって存在し、調査区中央で「く」の字に折れ曲がる溝を溝1、その溝1から派生した短い溝を溝2、調査区東壁からわずかにのぞく短い溝を溝3とする(図4)。特に溝1に関して、この理解には、原遺跡群における他の調査区において検出されている溝状遺構との関連をみる必要があるだろう。そのため、この溝1の性格、そして全容に関しては、卷末章まとめにおいて、記述することにしたい(p.21参照)。

溝1・2(図11、図版4上・中)

所見

溝1は全長28mを測る。南は窓穴住居2と3の間を通り、調査区中央に伸び、そこから東側へ折れ曲がって、東側調査区外へと抜けている。屈曲部以外ではこの溝は直線的であり、また幅も40～50cm前後とほぼ一定であって、ここに強い計画性をみることができる。溝の深さは南側直線部分では深さ30cmほどだが(図11a-a'断面参照)、東側直線部分では20cmに満たないほどになり(図11b-b'断面参照)、南側から東側へ向かうにつれて次第に浅くなる様子が看取できる。比較的遺存状況の良い南側直線部分では、溝の断面は逆台形を呈し、その立ちあがり部分はさほど急なものではない。埋土は黒褐色のシルト質土が中心で、これは窓穴住居などのそれと変わりない。埋土からは、この溝が潜水していた痕跡をみるとことはできなかった。

溝2は、溝1に接して、溝1の南側直線部分の屈曲部付近から東側へ伸びる短い溝である。溝1に対しては直角に交わる。溝の長さは1.7m、深さは約20cm(図11c-c'断面参照)を測り、その接点では溝1よりも浅い。埋土も溝1と同じく、黒褐色シルト質土である。ここではその形状から、溝2を「溝」、

つまり溝1が分岐したものとして捉えた。だが、一方で溝1と切りあう「土坑」として解釈できる余地もある。だとすれば、遺構検出の際の観察所見として、「土坑」が溝1を切ったものではなく、「土坑」を溝1が切った形として理解できる。つまり、先後関係としては、「土坑」の後に溝1が位置付けることができよう。

出土遺物

溝1・2とも、埋土中に土器の細片を含むのみである。図にはある程度形の分かる溝1出土遺物のみ図示した。1は高杯口縁部。断面は鉤形を呈する。2は甕などの口縁部であろう。口縁部は短く、「く」の字に折れる。3も口縁部。断面は鉤形を呈する。内・外面とも円塗り。4・5は甕口縁。4は断面鉤形の口縁部下に突帯を巡らせる。5はL縁部が「く」の字形に折れ曲がる。内面には弱い稜線が認められる。7~10は底部。10は底径6.4cm。底面は薄く、外面は強いくびれを有する。

他の遺構との先後関係

溝1はその埋土が竪穴住居などの他の遺構と等しく、今次調査区内においては出土した上器にも大差無いことを述べた。ただ、竪穴住居2・3との位置関係をみると、大きく削平を受けた現遺構面においても溝1と竪穴住居2・3とは50cmも離れていない。特に竪穴住居3において、入口を突出部に求めることができるならば、竪穴住居2・3と溝1が同時存在したとは考えがたいであろう。その先後関係については、溝1が周辺のピット群を切っていることが参考となろう。調査区の状況からのみでは、竪穴住居群やピット群より溝1は後出する可能性が高いといえる。

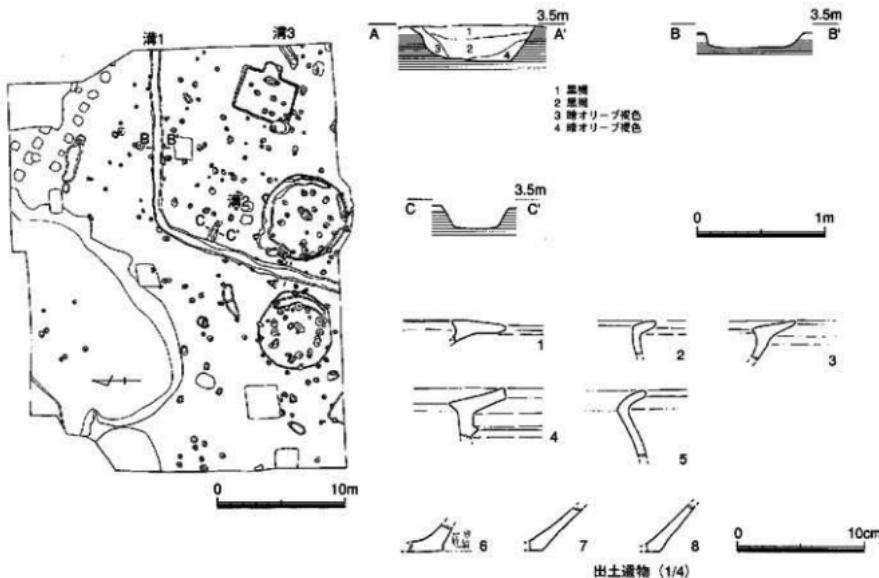


図11 溝1・2 (1/400, 1/40)

溝3(図12、図版4下)
所見

調査区南東隅、竪穴住居4の東側に存在する。調査区内には2m程存在するのみで、そのまま調査区外へ伸びる。溝の南側肩部は、一部ピットに切られている。溝の幅は70cm、深さは45cm程で(図12 a-a'断面参照)、溝の先端へ行くにつれて次第に浅くなる。溝の断面形はやや幅広のU字形をなし、底面には明確な平坦面を持たない。

溝の埋土は褐一黒褐色シルト質土が中心で、第2層(黒褐色シルト質土層)部分を中心として、まとまった土器の出土をみた。他に比して上器の出土が集中しており、溝内、もしくは近辺で、土器の廃棄行為が行われた可能性も考慮する必要があろう。

この遺構もその形状から、「溝」と判断したが、調査区外の様子は不明であり、土坑である可能性も多い。また「溝」と判断した場合、形態、そして土器混入のあり方など、溝1・2とは異なる要素が多い。その性格については、溝1・2とは異なるものを想定する必要があろう。

埋土内から出土している土器もいずれも弥生時代中期に後半に位置付けられるもので、他の遺構における出土土器と大差ない。近接して存在する竪穴住居など、他の遺構との時間的先後関係も、不明である。

出土遺物

溝内埋土の比較的上層部分(2層)よりまとまって出土した。1~5は甕口縁部。1は口縁部が「く」の字形に折れ、内器面に弱い稜線がある。2は口縁部断面が彌形を呈し、その下部に1条の突帯が巡る。3は口縁部が「く」の字に折れるが、内面に明確な稜線が走る。外器面はハケ目調整。4は口縁部が折れ、水平方向に張り出したもの。内器面の稜線上には刻日が施されている。外器面はハケ目調整。5は断面彌形の口縁部を有し、やや内傾する。6は蓋で、外器面にはハケ目調整を施す。7は器台、高杯などの脚部。外器面はハラミガキをし、丹塗りを施す。内器面にはハケ目調整。8は底部。底径7.8cmを測り、平底。

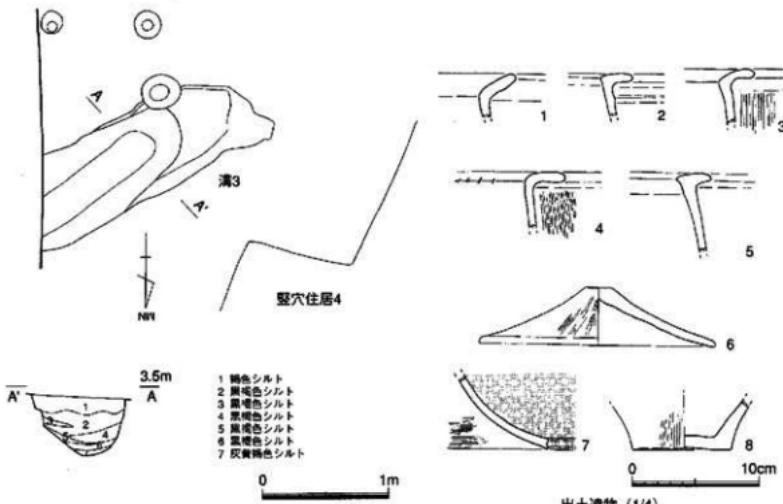


図12 溝3(1/40)

土坑(図13)

当調査区において、所見を記すべき十坑は3基確認された。図4にみるように、土坑1~3とし、以下に所見を述べる。

土坑1

掘立柱建物群の南側に近接して存在する。平面形は長さ3.5m、幅0.8mを測り、中央部付近では、幅1.1mとふくらみを有する。深さは20cmと浅く、底面は平坦をなす。各壁の立ちあがりはしっかりととしていて、何らかの掘り込みによるものであることは確かである。その西側には、平面形が長さ0.7m、幅0.5mの楕円形を呈し、深さ10cmを測る浅い土坑が存在する。

土坑1は、中央部のふくらみ部分から、複数の造構の切り合いを想定したが、土層をみる限り何らかの切りこみを確認することはできなかった。ただ、土坑1内の南東端にある円形の掘り込みは、この土坑に伴うものではなくピットとの切りあいを確認できなかった結果である可能性は捨てきれない。

出土遺物

この土坑埋土内からは、弥生土器を中心としたいくつかの土器片が出土した。1・2は甌などの口縁部。いずれも「く」の字形に屈曲する。3は底部で、外器面はハケ目調整を施す。4は器台で、底径9.5cmを測る。内・外面ともハケ目調整。また、小片のため図化しなかったが、土坑底面近くから、奈良時代に相当する可能性のある土器の口縁部片が1点出土した。これが造構の切りこみなどによる混入でなければ、土坑1は、この時期にまで下ることになる。

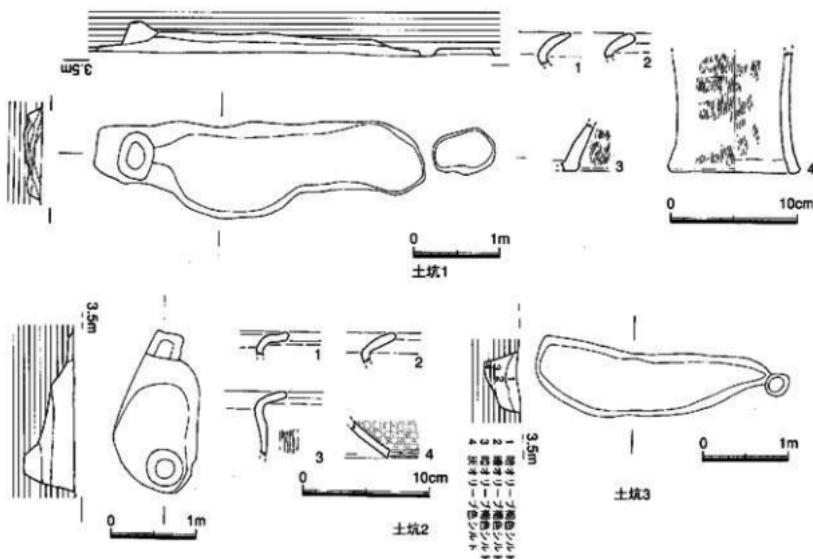


図13 土坑1・2・3 (1/60)

土坑2

竪穴住居4の南西隅を切りこむもので、長さ1.6m、幅1mの楕円形を呈する。土坑北側に円形のくぼみがあり、その部分が最深部に相当する。深さは現状で60cm、標高にして12.9m。やや大きいが、形状としては、柱穴のような形態を探る。なお、この土坑南東側には人形のピットがあり、これらとの関係も問題となろう。

出土遺物

1～3は甕などの口縁部。4は器台・高杯などの脚部。外器面に丹塗りを施す。

土坑3

竪穴住居2の北側に存在するもので、長さ2.7m、最大幅70cmの平面三日月形を呈する。西端をピットに切られる。出土遺物はなく、その形状や埋土の堆積から、風倒木痕など自然の営為による痕跡の可能性が高い。

掘立柱建物（図14、図版5中・下）

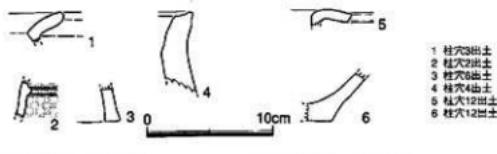
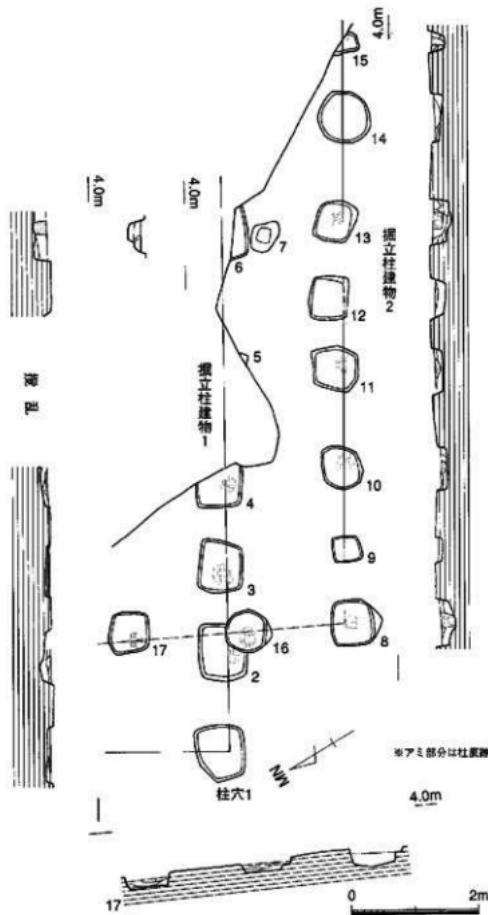
調査区北東隅において、一辺60～80cmの略方形の柱穴を主体とする掘立柱建物群を検出した。ちょうど調査区際において検出され、また近くに大きな擾乱孔もあるなど、その全容を明らかにすることはできなかった。柱穴の埋土は主として、褐～黒褐色のシルト質土。一箇所、柱穴同士の切り合いがある（柱穴2と16）ため、少なくともこの建物群は二時期に渡るものであろう。

まず、調査時に目についたのが、柱穴1～6の配列である。どの柱穴も比較的まとまった形（略方形）をなしており、その並びも直線的である。したがって、ここではこの柱穴群を建物の桁行として理解しておきたい。なお、この柱穴列の北側には、落ち込み部分が存在するが、この落ち込み部分に柱穴が存在した痕跡は無い。建物外側はこの柱穴1で、南東側ではさらに柱列が続いている可能性もある。梁行は柱穴1から北東へ折れ、調査区外へ向けて延びていくのである。なお、この梁行部分の柱穴は確認していない。この建物を掘立柱建物1とする。

また、柱穴8・16・17を有意な配列とみると、その柱列に直交する、柱穴8～15までの直線的配列に着目できる。柱穴8～17を梁行、柱穴8～15を桁行とみなせば、これら柱列も一棟の建物とできよう。これを掘立柱建物2と呼ぶことにする。ただ、8～15の柱列は、柱穴の大きさ、底面の高さなどアンバランスさが目立ち、すべてを桁行としてみなせるかは、再考の余地が十分にある事をあらかじめ断っておきたい。

掘立柱建物1

柱穴1～6よりなる建物である。この柱列を桁行とみなせば、桁行5間（+α）の建物となる。梁行は調査区外へ続いているため、確認できなかった。柱穴の深さは10～20cm程度で、遺存状況は決して良いものではない。柱列の一部に擾乱が及んでいるため、柱穴4・5・6は部分的に存在するのみで、特に柱穴5はかろうじて隅の一部が残り、その存在を示しているに過ぎない。柱穴は一辺70～80cm程の方形を呈し、底面の高さはほぼ一定で、標高3.2m付近に集中する。建物の主軸はN-59°-W（磁北）にとり、柱間は柱穴1から柱穴4までは、順に1.5m、1.3m、1.5mを測る。柱穴5・6を柱穴1～4と同様の方形を探るものと考えれば、柱穴4～5間や5～6間は、それぞれ柱間1.7m、2.2m程を想定できよう。これら部分の柱間は柱穴1～4に比してやや広い。柱穴2・3・4には、径13～20cm程の柱痕跡が残る。



標立柱建物1 出土遺物

標立柱建物2 出土遺物

- 1 柱穴3出土
- 2 柱穴4出土
- 3 柱穴7出土
- 4 柱穴4出土
- 5 柱穴12出土
- 6 柱穴12出土

図14 標立柱建物1・2 (1/80)

なお、柱穴6の南側に近接して、柱穴7が存在する。小形で、長さ50cm、幅40cmの歪な方形を呈する。底面の高さは、標高3m程で、掘立柱建物1の柱穴群よりもやや深い。「柱穴」と冠したが、その機能は不明。

掘立柱建物2

柱穴8~17よりなる、梁行2間(+a)×桁行7間(+a)の建物である。建物の主軸は、N-58°Wにとり、掘立柱建物1とほぼ等しい。いずれの柱列も調査区外へ続いている可能性があり、建物全体の姿を窺うことはできない。柱穴の深さは10~40cmと、これも決して良い遺存状況とはいえない。柱穴の平面形状は掘立柱建物1に比して、ややまとまりがない。しかし、方形(または略方形)を基調とする点では等しく、またその大きさには大小2種類がある。大きいものは一辺60~70cmを測り、掘立柱建物1の柱穴に比してやや小形である。小形のものは柱穴9と15が相当する。9は一辺40cm程の方形、15は30cm程の不規形をなす。15はやや異質で、他の柱穴群と同列に扱うことには躊躇を覚える。柱穴底の高さも掘立柱建物1に比して、かなりのばらつきがある。梁行部分の柱穴底は標高3~3.2m、桁行部分の柱穴底は標高3~3.3m。柱間は梁行部分が1.7mと等しく、桁行部分が柱穴8側から順に、1.2m、1.5m、1.6m、1.1m、1.3m、1.7m、1.2mを測る。柱穴11~12、12~13、14~15間がやや狭い。柱痕跡は、柱穴8・10・11・13・15にて認められた。径は13~20cm程で、柱穴15のみ、7cm程ときわめて小さい。

出土遺物・時期

柱穴自体の遺存状況は悪く、柱穴からは土器の小片しか出土していない。図化に堪え得るもののみ圖に示した。1は壺の口縁部。2は瓢形土器の胴部。突帯を有し、外器面は丹塗り。3・4は器台。3は底部、4は口縁部にあたる。5は壺口縁部。「く」の字に折れ、口縁部は水平方向に張り出す。また、口縁端部はわずかに上方へつまみ上げられる。6は底部。平底である。なお、後に述べる鋳型が柱穴14より出土している(p.19)。

柱穴の中からは弥生時代の遺物のみが出土した。1~4が掘立柱建物1、5・6が掘立柱建物2に伴うものである。いずれの遺物も弥生時代中期後半に位置づけることのできる遺物であろう。

先に述べたように、これら柱穴群の埋土は他の弥生時代遺構のものと大差なく、当調査地点からは弥生時代以外の遺構、遺物の量が極めて少ない。これらの状況から考えて、これら掘立柱建物群は弥生時代中期後半の遺構であると考えておきたい。時期的にみて、住居などの他の遺構と同時存在していた可能性も高いだろう。

その他の遺物(図15)

ここでは包含層出土など、遺構に伴わない遺物について述べる。1は白磁、玉縁の口縁部を有する。2は土師質土器の底部で、高台を持つ。3は磨製石器。残存長6.6cm、厚さ4.5mmを測る。

今次調査において、1・2に示される古代~中世の遺物はほとんど出土していない。

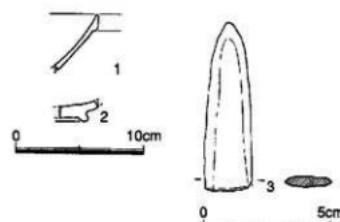


図15 その他の遺物(1/2, 1/4)

3. 遺物特説

鋳型 (図16)

今次調査では、青銅器鋳型が1点出土した。出土地点は、獨立柱建物2の柱穴14内である。以下の所見は福岡市教育委員会常松幹雄氏に御教示いただいた内容を藏富士がまとめたものである。

所見

鋳型は右英長石斑岩製で、残存長4.4cm、残存幅7.1cm、厚さ3.3~3.8cmを測る。鋳型面(A面)には、後のキズを除けば、中央に幅5mm、深さ2mm、左側には幅1.5mm、深さは1mmにも満たないという2本の線刻が存在する。この線刻が鋳型の彫り込みと考えられる。

また、この裏面(B面)にも、中央に幅4mm、深さ1mmの線刻、その左側にも浅い線刻がみられる。これが、鋳型としての彫り込みにあたるかどうかは不明である。

なお、鋳型の下端部には、A・B面にそって擦切痕がある。これは鋳型の再加工の過程で施されたもので、福岡県春日市のパンジャック遺跡などにも、同様の痕跡をみることができる。

鋳造品

鋳型面に認められる彫り込みから想定できる鋳造品として、銅矛と銅戈を挙げることができる。鋳型面右側の端面が生きているとすれば、その幅から考えて、銅矛とするのが適当である。そして、身幅は彫り込み線の間隔2.65cmの倍、5.3cmとなり、柄と峰の間の部分に相当しよう。

型式としては、中広形銅矛が該当するが、中広形でも古式にあたるものであろう。類例としては、福岡県春日市御陵遺跡出土品を挙げることができる。

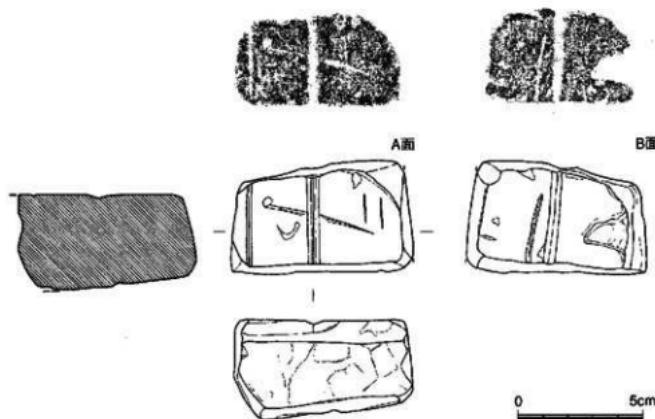


図16 鋳型 (1/2)

瓦質土器 (図17)

今次調査では、瓦質土器11点が出土した。その内、縄蓆文の残る10点を図示した。

所見

11点はいずれも破片で、接合できるものは存在しなかった。頸部付近の破片が1点あるだけで、他はいずれも胴部片。口縁部片は出土していないが、丸底短頸壺である可能性が高い。瓦質の焼成で、吸水性を残しているが、それでもやや硬質である。自然釉は認められない。胴部には縄目のタタキの後、数条の沈線を巡らし、更に下半部には縄目のタタキが施される。図17-1にみるように、頸部付近では、このタタキ痕をナデ消している。内側面はナデ調整。各個体とも胎土・色調など差異が少なく、すべてが一固体になる可能性もある。

出土状況

各十器片の出土位置は以下の通り。

- | | |
|------------|---------------|
| ・北側落部包含層内 | 1 · 2 · 8 |
| ・溝1 | 4 · 5 · 6 · 9 |
| ・竪穴住居2 · 3 | 3 · 7 · 10 |

北側落部、溝1内では、多くの弥生上器とともに検出した。ここで注目したいのは、竪穴住居2·3から出土したものである。住居の残りは極めて悪く、その覆土から出土した遺物の時期比定には注意を要する。だが、図17-7は竪穴住居2内で環状に巡る凹部、そして図17-10は竪穴住居入口部分の凹み部分、しかもいずれも床面近くから検出するといった、いずれも比較的搅乱による混入の可能性の低い位置より出土している。そして、各住居の覆土内からは弥生時代以降の遺物の出土は無く、今次調査地点全体をみても、多くは弥生時代の遺構、遺物によって占められている。これらの状況からみて、住居出土の瓦質土器は、住居焼絶後まもなく住居内に流れ込んだもの、つまり住居の時期に近接した時期の所産として捉えておきたい。

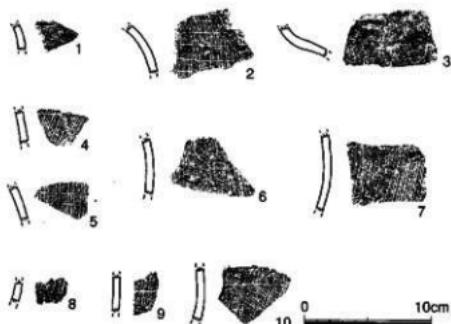


図17 瓦質土器 (1/4)

まとめ

今回の調査地点は、原遺跡群指定地の北東側端部であったにもかかわらず、多くの成果を挙げることができた。以下に、その成果・問題点等を列記し、まとめて代えたい。

時期について

遺構の遺存状況は悪く、遺物の出土量も決して多くはなかったが、竪穴住居3の床面上から出土した土器群（図8）は、この住居廃絶に伴うものといえ、この竪穴住居の年代を示すものとしてみなすことができる。この土器群は須恵II式新段階に相当するものと考えられ、弥生時代中期後半でも新しい段階に当ろう。この段階以外の遺物が極めて少ないのが、今次調査の特徴ともいえ、竪穴住居など遺構の多くは、ほぼ弥生時代中期後半の所産である可能性が高い。ただ、土坑1からは1点、奈良時代のものである可能性のある土器片が出たし、土坑1はこの時期に、溝1は後述するように時代は下るものである可能性がある。

住居構成について

竪穴住居は計4軒検出できた。円形住居が2軒、方形住居が2軒である。出土した遺物に大差はなく、すべての住居を須恵II式新段階の範囲に収めて考えることができよう。円形住居は30m²ほど（径6~6.5m）、方形住居は17m²ほどで、方形住居は円形のものに比して小形である。円形住居十小形方形住居という組み合わせは、宝台遺跡（城南区）、松木田遺跡（西区）、東入部遺跡（早良区）などにみることができる。このような弥生時代中期後半における住居構成について、吉留秀敏氏は、円形住居が中心的な住居形態で、方形住居が補助的な立場にあること、そして集落内においても分布する領域が異なっていることを述べた。また住居の大きさ（格差）に規格性があるという重要な指摘もなされている（吉留1999）。吉留氏の示すところに拠れば、現在のところでは、住居規模にみる有田遺跡群と原遺跡群にみる差は歴然としている。原遺跡群における当該期の様相解明は、その端緒がようやく見出されたばかりである。今後の調査の進展に期待したい。

文献

吉留秀敏1999「福岡平野の弥生社会」考古学研究会開山例会講『論争・古墳』シンポジウム記録1

溝状遺構について

調査区中央に認められた溝1はL字形状を呈し、屈曲部以外は直線的であるなど、特徴的な方を示している。同様の溝状遺構は南西隣で行われた第2次調査時においても確認されている（図1）。この溝も同じくL字形を呈するもので、現状における溝の幅、深さなど共通点が多い。その報告に拠れば、掘立柱建物や井戸状遺構といった古代・中世（10~12世紀）の遺構とのまとまりを有するため、「弥生時代中期の溝と特定できない」という所見が添えられている（柳田編1997）。状況をみる限り、2次調査と今次調査の溝1とは密接な関係を窺うことができ、この調査所見を尊重すれば、溝1は古代・中世（10~12世紀）にまで下る可能性があろう。

文献

柳田純孝 編1997「原遺跡9」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第544集

瓦質土器について

竪穴住居の覆土などから、計11点の瓦質土器の出土をみた。胴部片が主で、全体の器形を窺い得るものではないが、福岡市早良区次郎丸所在の次郎丸遺跡出土瓦質土器に似るという指摘を受けたので(註)、ここにその資料を紹介する(図18)。

この瓦質土器は溝の埋土より出土したもので、その全形を知ることができる(中村編1996)。口径15.3cm、器高22.5cmを測り、図をみると限り、横長の偏球状の胴部、そして直線的に外反し端部は肥厚しない口縁部を有する。口縁部はナデ調整、胴部の外面上位に縄目タタキ、下半に格子目タタキを施し、内面はナデ調整により仕上げられている。なお、今回出土の瓦質土器片からは、格子目タタキを施したものは存在しなかった。

本文中では、これら瓦質土器の時期を竪穴住居2・3とあまり変わらない時期(弥生時代中期後半)に求めた。だが、これら土器の出土は、あくまでも住居覆土内のものであり、その厳密さには欠ける。今後、より良好な状態での資料の出土を期待したい。

註

東京国立博物館白井克也氏の御教示による。

文献

中村啓太郎編1996「次郎丸遺跡I」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第468集 福岡市教育委員会

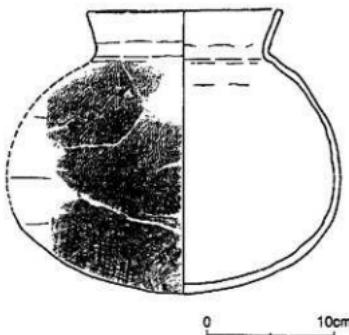


図18 次郎丸遺跡出土瓦質土器(1/4)

図 版



調査区西側（北から）



調査区東側（北から）



北側落込部
(南東から)

図版 2



竪穴住居1（北から）



竪穴住居2（北から）



竪穴住居3（北西から）



竪穴住居 4
(北西から)



竪穴住居 3 遺物出土状
況 1 (北西から)



竪穴住居 3 遺物出土状
況 2 (北東から)

図版 4



溝1・2 (北から)



溝1 (西から)



溝3 (西から)



土坑1（北西から）

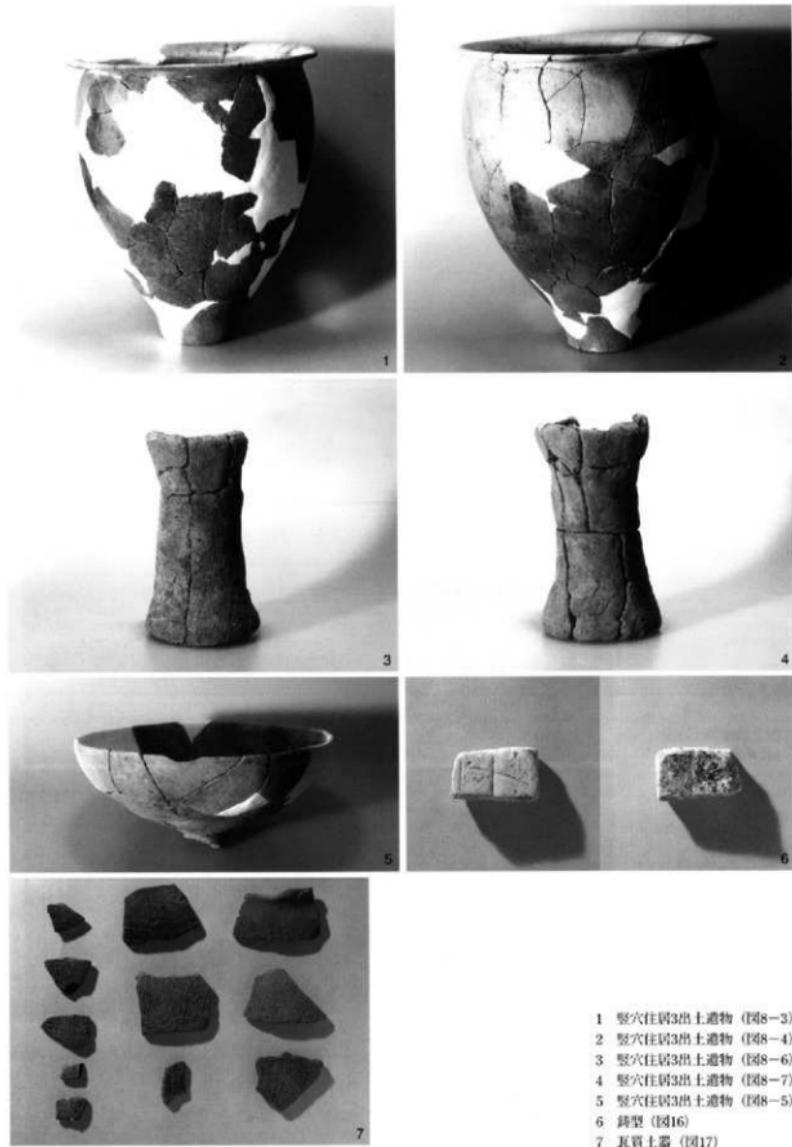


掘立柱建物1・2
(北から)



掘立柱建物1・2
(北西から)

図版 6



1 壺穴住居3出土遺物 (図8-3)
2 壺穴住居3出土遺物 (図8-4)
3 壺穴住居3出土遺物 (図8-6)
4 壺穴住居3出土遺物 (図8-7)
5 壺穴住居3出土遺物 (図8-5)
6 踏型 (図16)
7 瓦質土器 (図17)

出土遺物

原 遺 跡 10

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第688集

2001年（平成13年）3月30日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
(092) 711-4667

印刷 ソウヤマ印刷
福岡市博多区中央町10-5
(092) 291-6160

